

令和元年6月5日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04088

研究課題名（和文）社会問題に関するテレビ報道によるイデオロギー構築の多面的ディスコース分析

研究課題名（英文）Multi-modal Critical Discourse Analysis of Interpretive Frameworks Constructed by Television News on Social Issues

研究代表者

糟屋 美千子（KASUYA, Michiko）

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：20514433

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、クリティカル・ディスコース分析（CDA）の手法を用いて、社会問題を取り扱ったテレビニュースを分析し、特定の考え方の枠組み（イデオロギー）が、日本の公共放送・民間放送の日々のニュースや週末の報道番組によって、どのように構築されているかを分析した。その結果、ニュースの中で、特定の部分が重要なもの、または重要でないものとして扱われたり、登場する様々な立場の人たちの特定の側面が強調される一方で別の側面が存在しないかのように扱われたり、原因や結果が一面的に取り扱われるといったことが相互作用することで、一つの特定の方向性を持つ考え方が確定していく仕組みが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、社会問題に関するテレビ報道の言語的・非言語的要素が相互作用してイデオロギーを構築する仕組みを明らかにした。このように、メディアによる報道における、社会問題に関する深部にある隠れたイデオロギーの構築メカニズムが解明されることで、その問題点を検討し、本質的な解決策を探究することが可能になるという社会的意義が期待される。また、本研究で作成した分析フレームワークは、他の報道の分析にも適用できると考えられる。そして、人々の福祉とよりよい暮らしに貢献するためには具体的にどのような報道をするのが望ましいのかについて研究を深化させることに貢献すると期待される。

研究成果の概要（英文）：This study examined the daily and weekend news discourse of Japanese public and commercial broadcasting corporations that reports on social issues. The study used critical discourse analysis as an approach to decipher ideologies produced by the discourse. Based on a multi-modal approach, it explored various linguistic and non-linguistic elements and revealed how the discourse works to construct specific interpretive frameworks for understanding social issues, by foregrounding and backgrounding selected aspects of events, empathizing and concealing certain attributes of people, as well as producing a limited causal relationship.

研究分野：メディア・ディスコース研究

キーワード：クリティカル・ディスコース分析 テレビ報道 イデオロギー 社会問題 マルチモーダル

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現代社会は、環境・医療・労働・貧困・教育など、様々な分野で深刻な問題を抱えており、こうした社会問題の背景には、社会の持つ考え方や価値観があり、言語（ディスコース）がそれに影響を与えている。特に、ニュースは社会的・政治的・教育的役割を持ち、人々はニュースを見ることで社会における出来事を理解する。中でも、テレビニュースは人々が社会における出来事を解釈するうえで影響力が大きい。社会的現実を中立に反映するのではなく、社会における考え方の枠組みを形作る働きがある。

マスコミュニケーション研究の分野では、テレビニュースが人々の考え方の枠組みに及ぼす影響の大きさが指摘され、ニュースの偏向性が議論されてきた。そして、ニュースは出来事そのものではなく、意味ある話として作られた出来事の解釈や説明であり、それを人々に示し、広める働きを持つという指摘がなされてきた。しかし、従来のマスコミュニケーション研究の分野では、社会問題に関わるテレビニュースのイデオロギー構築の仕組みについて、そのディスコースを微細に検討して、分析の言語的根拠を明示した研究はほとんど行われていない。また、テレビニュースは、言語面だけでも、情報の選択、話の展開、語彙・語法など様々な要素が複雑に組み合わされているが、それに加えて、映像などの非言語的要素が相互作用してイデオロギーを構築している。しかし、こうした多様な要素を包括的に見ることを可能にする、テレビニュースのディスコースのマルチ・モダリティ分析の研究はまだ始まったばかりであり、イデオロギー構築のメカニズムを、言語学的に微細に検討し、さらに映像などの非言語的要素も含めて多面的・多層的に明らかにする研究が求められている。

2. 研究の目的

本研究では、質的社会分析法の1つであるクリティカル・ディスコース分析（CDA）の手法を用いて、日本のテレビ報道を分析した。CDAは、ディスコースに言語のみでなく視覚イメージや音響効果なども含めたうえで、ディスコースは社会の他の要素と密接に関係しており、社会的に決定されるだけでなく、社会的、政治的、認知的、倫理的、物質的な影響力を持つ、という考えに基づいている。そして、ディスコースを微細に分析することによって、社会における人々の知識、信念、態度、価値観などがどのように構築されているかを明らかにし、それらの教え込み・維持・変容の結果生じている社会的不平等や矛盾など、社会の問題点を解明し、解決していくことを目的としている。

本研究は、社会問題に関する現代社会のイデオロギーが、日本の公共放送・民間放送の、日々のニュースと週末の報道番組のディスコースの言語的要素・パラ言語的要素により、どのように構築されているかを明らかにすることを目的とした。社会的問題に対して、これまで異分野と考えられてきた言語学的アプローチを用いることで、社会学におけるテレビ報道のディスコースのイデオロギー構築のマルチ・モダリティ分析に新たな視点をもたらし、その微細化・多面化に貢献することを目指したものである。

3. 研究の方法

(1) データの収集・要素の抽出

データとして、日本の公共放送と民間放送の、日々のニュースと週末の報道番組のテレビニュースを用いた。これらのニュースを録画し、録画データの中から、社会問題に関する報道を選択した。録画記録をもとに、アンカー・レポーター・ニュースリーダー・インタビューの言葉などの言語的要素、映像などの非言語的要素を書き起こし、スクリプトを作成した。スクリプトをもとに、クリティカル・ディスコース分析を中心としたディスコース理論やメディア理論に沿って検討を行ない、イデオロギーを構築していると考えられる要素を抽出し、それらの要素を分類・整理し、体系化した。

(2) ニュースの分析・検討

抽出された要素に沿って、テレビニュースの言語的・非言語的要素の相互作用によるイデオロギー構築のメカニズムを検討した。具体的な分析の手順として、まず、ニュースの中から、情報の選択、話の展開、語彙・語法、テロップ・映像などのディスコースの要素が、出来事についての特定の見方を構築しているところを抽出していった。次に、抽出したさまざまな要素の組み合わせで、どのように考え方の枠組みが構築されているかを、ニュースの話の流れに沿って検討していった。ディスコースの要素のうち、情報の選択については、キャスターの解説やインタビューにより、何が語られ、また、語られなかったかにより、どんな考え方が強調され、それ以外の考え方が排除または背景化されたかを考察した。話の展開については、テレビニュース全体の大きな枠組みにおける特定の解釈の強調や、出来事の並べ方、文と文、節と節の接続などを検討した。語彙や語法については、特定の考え方を構築していると考えられるものを検討した。視覚的要素として、テロップや映像がどのようなメッセージを伝えているかを考察した。

また、ニュースにおけるディスコースの要素による考え方の枠組みの構築を分析する3つの視点として、重みづけ（何に重点を置いているか）、出来事の因果関係（何を原因・結果としているか）、登場人物の属性（どのような属性を持つ存在として描いているか）を用いた。

研究の第一段階として、社会問題に関する日々のテレビニュースを分析し、イデオロギーが

どのように構築されているかを検討した。第二段階として、週末のテレビ報道番組を分析した。第三段階として、日々のニュースと週末の報道番組を総合的に検討し、イデオロギー構築のメカニズムを整理した。

4. 研究成果

(1) ニュース全体としての考え方の枠組みの構築

テレビ報道における考え方の枠組みは、ディスコースのさまざまな要素（情報の選択、話の展開、語彙・語法、テロップ・映像など）が組み合わされることで構築されていた。ディスコースの複数の要素が一貫して同じ考え方を強調したり、別の考え方を軽く扱うことで、特定の考え方が強調されていた。まず、ニュース全体の大きな話の展開については、キャスターによる問いかけや、テロップや映像の変化などが、話題の変化のきっかけになっていた。また、報道する出来事の解釈をニュースの最初で提示したり、ニュースの最後での出来事の解釈の確定する部分で特定の情報を詳しく繰り返し述べることで、特定の考え方が強調されていた。また、ニュースの途中で、ニュース全体の解釈とは異なる考え方が示されても、その後、それを軽く扱ったり、変形することで、そうした情報は検討されることなく、ニュース全体の枠組みが支持されるようになっていた。

(2) 3つの視点からの検討

ディスコースの要素の相互作用による特定の考え方の構築を3つの視点（重みづけ、因果関係、登場人物の属性）から検討することで、イデオロギー構築の仕組みをより詳細に明らかにすることができた。

重みづけ

ディスコースの各要素は重みづけをすることで、特定の考え方を構築していた。ある部分は重く扱われ、ある部分は軽く、または全く存在しないもののように扱われることで、何が問題で、何を検討しなければいけないのかなどについての考え方を構築していた。あることがニュースのどこかで言われたというだけでは、それが重要なものとして扱われたとは言えず、どのような問いかけや解説の中で使われたか、どのような順番で言われたか、言われたことがどのように他の部分で使われたかなどによって、それがニュースの中で重みづけられるかどうか決定されていた。

もしニュースが強調する特定の考え方についての批判の声が全く取り上げられなかったとしたら、視聴者はそのことを疑問に思うかもしれないが、ニュースでは、これらの批判を取り上げた上で、その後、軽く扱ったり、無視するということが起きていた。そうすることで、こうしたニュースを見た視聴者が、次にどこかで同じような批判を聞いても、それほど重く受け止めなくなる可能性があると考えられた。特定の考え方を重みづけ、これに対する疑念や批判を軽く扱うのであれば、その根拠を示し、視聴者にわかりやすく説明し、視聴者自身が判断できるだけの情報を提供する必要があると考えられた。

因果関係

ディスコースの各要素は因果関係を設定することで、特定の考え方を構築していた。特定の部分を原因や結果として取り上げることで、出来事を見る考え方を形成していた。あるニュースの中で構築されている特定の因果関係について、他の報道では異なる視点や発言が報じられているものもあったが、そうした広い因果関係は伝えられないということが生じていた。また、こうした限定的な因果関係の構築について、因果関係が成り立つための根拠の検討が十分にされていないということも生じていた。このように、ニュースが因果関係を述べるときは、その根拠や前提が正しいかをまず検討し、また、その根拠から、その結論が導けるのか、原因と結果のつながりを見る必要があると考えられた。そうすることによって、視聴者が適切な因果関係で物事をとらえ、問題の原因を知って適切な対策を考えることを、報道が支援することができる考えられた。

登場人物の属性

ディスコースの各要素は登場人物の属性を描くことで、特定の考え方を構築していた。さまざまな属性のうちのある側面だけが前面に出される一方で、別の側面が描写されず背景化されたり、変形されたりすることで、人々が偏った属性を持つ存在として描写されていた。

ニュースの中で、特定の人々が評価すべき存在として描かれる一方で、他の人々は問題を抱えた存在として描かれていた。評価すべき存在として描かれた登場人物にも検討すべき側面があることは述べられなかったり、問題があるとされている人々については別の側面もあることが伝えられないということが起きていた。特に、問題を抱えているとされる人々については、その人々の置かれている社会的状況や、視聴者と変わりなく生活してきた側面を持つことは背景化され、視聴者とは異なる、遠い存在として描かれていた。また、ニュースの出来事に関わっている人々が、現実には広範囲に及びにもかかわらず、影響を受けているとしてニュースの中で取り上げられている人々が限定されることで、視聴者が、不利益を受けた人々の置かれている状況を、わがことのように共感して受け止め、問題を自分の問題としてとらえることを難しくしている可能性があることがわかった。

(3) 研究結果のまとめと今後の展望

本研究では、様々なテレビ報道において、特定の考え方の枠組みがどのように作られているかを分析、検討した。その結果、ディスコースの要素により、重みづけ、因果関係、登場人物の属性が設定され、出来事についての考え方の枠組みが作られていたことがわかった。重みづけにより本質的な問題から目をそらすことになったり、因果関係の設定により問題を広い因果関係で考えにくくする方向に働いていたり、登場人物の属性の設定により一部の人が視聴者からは遠い存在とされていたことがわかった。

本研究は、テレビ報道の言語的・非言語的要素が相互作用してイデオロギーを構築する仕組みを明らかにした。このように、メディアによる報道における、社会問題に関する深部にある隠れたイデオロギーの構築メカニズムが解明されることで、その問題点を検討し、本質的な解決策を探究することが可能になるという社会的意義が期待される。

また、今回は、日本の公共放送と民間放送のテレビ報道において、イデオロギーがどのように構築されているかを検討したが、今後は、分析対象を広げて、ディスコースの要素の相互作用や、3つの視点の精緻化など、さらに分析を進め、特定の考え方がどのように作られているかをより詳細に明らかにしていくこと必要であると考えられる。本研究で作成したイデオロギーを分析するフレームワークは、社会問題に関するテレビ報道以外にも広く適用できると考えられる。そして、メディアの偏向性を指摘するにとどまらず、人々の福祉とよりよい暮らしに貢献するためには具体的にどのような報道をするのが望ましいのかについて研究を深化させることに貢献できると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

糟屋美千子、福島第1原発事故収束宣言の報道における考え方の枠組みの構築 - クリティカル・ディスコース分析による検討 -、兵庫県立大学環境人間学部研究報告、査読有、2017、19号、pp. 1-20

〔学会発表〕(計1件)

KASUYA, Michiko. Japan's broadcasting reporting on Fukushima seven years later: Construction of interpretive frameworks. British Association of Applied Linguistics. 2018.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。